いただくことにより、生徒の生きる目標や勉強する意欲を喚起し気概を持たせて大学に送ることができると考えます。

本校は、先輩諸氏もそうであったように地域の優秀な生徒の集団です。様々な分野で活躍できそうな能力の持ち主が沢山いるのですが、実際生徒と面談をすると手堅くこぢんまりと生きることを考えている生徒が多いように感じます。理系の1クラスの女生徒15人の将来の希望する職業が看護師10人という結果、2年生233人中、教員と公務員を希望する生徒が合わせて93人もおりました。手堅い生き方は賢いと思いますが、勉強ができて優秀であればその能力を生かすためもっと大きな夢を持ってもよいと思います。残念ながら、そういった生徒は極めて少数です。

「夢」と「志」とはなにか

「夢」は、医者になりたい…医者になってしまうと夢は終わる。「志」は、地域の多くの病める人たちのために尽くしたい。自分だけではない、ほかの誰かのためにという気持ち。個人的にこのように定義してみました。

いかなる仕事に就いても、仕事は楽しいことより、辛く厳しいことの方が多いように感じます。辛く厳しい仕事でも、やり甲斐を感じて働けるのは、夢があり仕事に誇りや使命感を持つからではないでしょうか。自分のためだけではなく、社会や地域、家族、ほかの誰かのために一生懸命働くことによって、感謝され自分の存在価値を認め、働く意義、生き甲斐を感じるのではないでしょうか。

取り組み

1年生では、多くの方の話を聞かせることを主体にしていきます。年に5～6回の講演を予定しております。極めて有名な方を呼んで全校に聞かせる場合、クラス毎に2～3人ずつの場合、学年単位でパネルディスカッション形式で行う場合、職業の分野別（20～30分野）で話を聞く場合、学部別に大学教授の話を聞く場合など、様々な方法・形式で、大勢の方の話を聞き視野を広げます。さらに、自分たちでも職業、大学・学部・学科を調べます。それらをもとに、最後に自分のライフプランを作ってみます。

2年生は、体験活動がメインです。ライフプランをもとに、自分の希望する大学のオープンキャンパスに参加し、また、自分が目指す職業を見つけてインターンシップし、その職業が自分に適しているのかを確かめます。それらをもとに進学する大学・学部・学科を研究し決定した後、ライフプランを再確認し、生き方・あり方の確認、夢と志を固めます。

3年生では、2年生で決めた目標に向かって強い意志を持ち受験に向けて努力します。

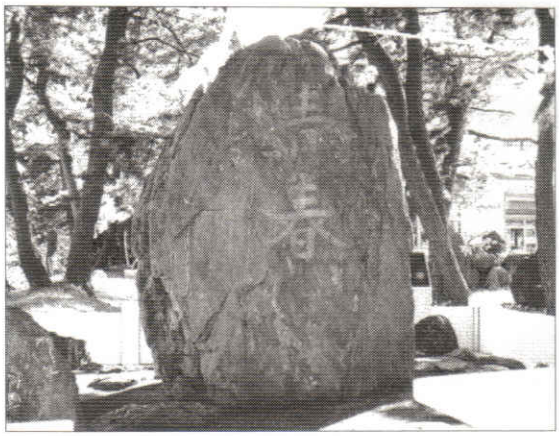
最後に

生徒が将来の方向を決め、意欲を持って学習に取り組むためには、大きく分けて3つの道筋があると思います。1つ目は、生徒が教科に興味を持ち、学問的に勉強したいと感ずること。2つ目は、大学に魅力を感じてこの大学に入りたいと思うこと。3つ目は、将来の仕事や生き方から方向を決めること。

我々教員は、生徒にだけ多くを求めるのではなく、指導法の改善をして生徒が授業に魅力を感じて主体的に学習に取り組むように努力しています。生徒から授業アンケートをとり、指摘された部分を改善すべく全教員が研究授業を実施することにしました。1人でも多くの生徒が意欲的に授業・勉強に取り組み、そこから進路が決まることを期待しています。

しかし、これまで、指導法の改善、朝学習、土曜学習、補習、添削、課題、学校でできそうなことは全てやっていて、これ以上の成果を上げるには別のことを考える必要がありました。これまでの進路指導は、どちらかというと出口指導が主であったように思います。

このプロジェクトは学校だけではできません。多くの方の協力が必要です。特に同窓生の皆さんには大変多くのものを期待しております。生徒、教員、保護者、同窓生、地域の力を合わせたものこそが、本当の能代高校の力と考えています。今後一層のご協力をよろしくお願いいたします。



＜青春の碑＞

能代高校の旧樽子山校舎跡地に立つ記念碑。能代高校同窓会により昭和49年に建立。本紙1ページに掲載した文言が書かれている。　平成18年9月、太田勝治・撮影

～恩師インタビュー～　谷内成治先生

「能代高校生は私の誇り」

多くの同窓生の思い出に残る恩師、谷内成治先生に東京同窓会会報掲載のためインタビューにお答えいただきました。

谷内先生は昭和48年（1973年）4月から昭和60年（1985年）3月まで能代高校に在職。数学を担当されていました。

◇能代高校で印象に残っている出来事や生徒について教えてください。

高校3年間、ひたむきな努力の結果、見事念願の大学に合格した時の、生徒達の喜びの表情。又、厳しい部活動（軟式庭球部顧問でした）にもめげず、良く耐え、試合毎に、ひとまわりも、ふたまわりも、人間的にたくましく成長していく選手の姿。全県大会での個人、団体の優勝や、個人戦でインターハイ出場権を獲得したときの、部員一同の歓喜に満ち溢れている姿等は、胸をうつものがありました。

◇能代高校気質、能代高校生らしさを、どういうところに感じましたか。

生徒達は実に大らかで、屈託がなく、友情心厚く、又、それぞれ鋭い感性を持ち合わせていると感じます。又、自分の掲げている目標に対しては、常に前向きに対応する知性と、行動力を持っている、私が誇りにしている高校生です。

◇最近の先生の近況をお知らせください。

5500枚余りのＬＰ・ＣＤ・ＤＶＤを有し、ＪＡＺＺ専門のラジオ放送設備を備えたオーディオルームで、じっくりとＪＡＺＺを聞き込んだり、月1度の割合で、東京や東北地方のコンサートホールや、ライブハウスでライブ演奏を楽しむ、ＪＡＺＺ三昧の日々を送っております。

◇最後に、能代高校生（同窓生）へのメッセージをお願いします。

自分を信じて、失敗を恐れず、常に自分の可能性に挑戦する姿勢を持ち続けてください。

谷内先生、ありがとうございました。インタビューにあたっては鈴木美千子さん（第53期）にご協力いただきました。

＊お話を聞きたい先生、近況を知りたい恩師など、リクエストがありましたらお寄せください。

秋田での再会

第45期　三浦　洋

6月22日、秋田市への出張ついでに更に1泊した。実は同夜、秋田市在住の48期野村松信君が幹事役となり、市内在住の私の同期生らに声をかけて「歓迎会」と称して飲み会を開いてくれたのだった。またとない機会だったので、翌日には母校を訪問するという予定も組んだ。

夕方、市内に勤務する池端強志君、信太昭和君、能代の西村省一君と三種町の加藤成君らの同期生に加えて、市内在住の高杉静子さん（ホームページ「秋田ＮＥＷＳ」は秋田の情報源として有名）の5人に野村君と私を加えた7人が秋田駅前の居酒屋に集った。

池端君とは卒業以来の32年振り、信太君とは22年振りである。皆老けた分を差し引けば卒業アルバムのままであるがそれはお互い様、とにかく感激の再会である。また高杉さんとは東京同窓会のHPを立ち上げる以前からの所謂メル友であり、何とこの日が初対面であったが、何となく再会した気分になったのは不思議である。

積もる話だらけの「私の歓迎会」は思い出話が出尽くすのを待たずに、あっという間に4時間が過ぎてとりあえず中締めとなり、ここで高杉さんとはお別れし、残る面々は野村君の案内で川反のスナックへと向かった。後日談だが、川反に行ったこと、そこで「青春時代」を皆で歌ったこと、帰りにホテルまで歩いたこと等、本来貴重な思い出となるべきこの夜のことは、デジカメ画像を除くと殆ど記憶に残っていないのは残念である。

翌23日土曜日9時、野村君が前夜の疲れを微塵もみせずに自家用車でホテルまで私を迎えに来てく